

三人の母 (八卷)

帝キネ 現代映畫

原作者 小笠原白也  
脚色者 村田圭三  
監督者 曾根純三  
撮影者 塚越成治

主要役割

衣川歌子 歌川八重子  
妹千代子 平塚泰子  
母おみつ 星樹子  
阪本忠哉 鈴木英府  
子忠生 鈴木勝彦  
妻郁子 千草香子  
姉繁子 浅霞京子  
山根圓藏 尾崎野節子  
妻お孝 小川崎静子  
鐵一 青木芳美  
岡豊助 青木芳美

「略筋」阪本忠哉と衣川歌子との間に生れた忠生、然し浮世の荒波は生みの子と歌子との仲を割いた。忠生は山根夫婦の慈愛の手に育まれ、彼の兄と信じる鐵一と共に平和な幸福な日を送つてゐた。阪本の妻郁子は、忠生を阪本家の相続人として迎へんとした、これを知つた歌子は長い間忘れてゐた肉親の子の愛に甦つた。そして忠生と鐵一が伊勢参宮に行つた事を知り後を追つた。自分が生みの母であること一言傳へたために。波瀾やかな伊勢の海、浮世、柵を超えた母子が始めてその愛に泣いたのであつた。

生みの母、育ての母、義理の母、この三人の母が、各々の異つた我が子への愛を描く、テーマは甚だ「新派悲劇型」のものであるが、この映畫は、そこに新しい空気を漂してゐるが、鮮やかなタッチでこの古い涙の物語を活さうとした。そこに監督者の試みがある。苦心がある。そして

てその試みなり、苦心なりは相當に、或ひは相當以上に酬ひられてゐる。古い酒も新しい器に盛られた時、また新たな味を醸すものである。こゝを思はせられた。それ程に曾根純三の手腕は氣の利いたものであり、従来の臭味一を巧みに抜きさつて、漂泊された「新派悲劇」を生み出してゐるのである。俳優の指導にも、劇の展開にも、カメラのポジションにも、その一つ一つに近代的な注意が拂はれてゐるのだ。

興行價値的にも、小さな突込みを巧みに作つて、観客子女の涙を絞ることな忘れてゐない。俳優は子役の鈴木勝彦が断然押してゐる。カメラは際立つて美しく軟かい。鈴木重三郎、興行價値——新形式の新派大悲劇、そのくどくないところが真い。いま流行の「母」映畫中の白眉でもある。東京では三週連続してゐる。

(四月十日 淺草常盤座)